

第12回上智大学・慈恵医大
ジョイントシンポジウム

医療におけるスピリチュアルケアの現状

日時：2019年12月4日（水）17:30～19:30

会場：東京慈恵会医科大学 大学1号館講堂

定員：200名 入場無料・申込不要（どなたでもご参加いただけます。）

～プログラム～

◆開会の挨拶◆

松藤 千弥先生（東京慈恵会医科大学 学長）

《第1部》◆講演◆

伊藤 高章教授（上智大学院実践宗教学研究科 死生学専攻主任）

「医療の言葉・スピリチュアルケアの言葉」

西山 悦子教授（上智大学 総合人間科学部 看護学科）

「看護師のスピリチュアルな痛み」

中村 敬先生（東京慈恵会医科大学附属第三病院院長 精神神経科 教授）

「あるがままに生きる ～森田療法による心の支援」

神 仁先生（東京慈恵会医科大学附属病院 SCW 同大学非常勤講師）

内山 美由紀先生（東京慈恵会医科大学附属病院 SCW 同大学訪問研究員）

「慈恵医大附属病院におけるスピリチュアルケアの歴史と現状
～症例報告を交えながら～」

《第2部》◆総合討論◆

◆閉会の挨拶◆

曄道 佳明先生（上智大学 学長）

総合司会：大橋 十也先生（東京慈恵会医科大学総合医科学研究センター センター長）

下山 直人教授（東京慈恵会医科大学大学院医学研究科 緩和医療学）

懇親会：学生ホール 19:30～21:00（大学1号館 4階）

【お問合せ】

東京慈恵会医科大学附属病院

〒105-8461 東京都港区西新橋 3-25-8

TEL:03-3433-1111（内線：3745）

「医療の言葉・スピリチュアルケアの言葉」

上智大学院実践宗教学研究科 死生学専攻主任 伊藤 高章教授

医療現場におけるスピリチュアルケアへの取り組みは、〈人間をどのような存在と考えるか〉という大きなテーマと関わっている。一方で、人間の叡知を総動員してもたどり着けない、未知と神秘を抱える超精密メカニズムである生命・身体を理解し、病に取り組もうとする科学の視点がある。他方、個として自己の歴史を重ねつつ社会と相互作用を持ち、主観を通して世界を経験し表現する存在を、行動科学的に理解しようとする視点がある。さらに、そのような(いのち)を生きる人間という存在そのものに、共感しつつも理解しきれない他者性を感じ、それを人文学的に語るスピリチュアルケアの視点がある。これら3つの視点は、それぞれ異なった言葉を使って人間を語る。語りの重なり合いとズレを考えてみたい。

「看護師のスピリチュアルな痛み」

上智大学 総合人間科学部 看護学科 西山 悦子教授

スピリチュアルな痛みは患者だけにあるものではなく、人間としての意識や理性、感性や思考をもって生きている誰もがもつ苦境や状況である。日常的に人間の限界や災いに直面せざるをえない医療従事者は、人間である以上、スピリチュアルな痛みをもっていると予想できる。ホスピスの医療従事者なら、なおのことであろう。患者を人間同士として相手にしているなら、その死別によって痛みを感じ、その痛みを整理していかざるを得ないはずである。そうでなければ、その人は人間を取り扱う無感情の機械となり、死は“流れ作業”になる恐れがある。グリーフワークを含むこうしたスピリチュアルな痛みを、医療従事者がどのように対応しているかをチェックすることは、重大な課題である。

「あるがままに生きる ～森田療法による心の支援」

東京慈恵会医科大学附属第三病院院長 精神神経科 中村 敬先生

森田療法は、慈恵医大精神医学講座初代教授、森田正馬によって 1919 年頃に創始された精神療法である。森田によれば、神経症性不安の源である死の恐怖と、よりよく生きようとする欲望(生の欲望)は、人間心理の両面の事実である。にもかかわらず神経症の人びとは、不安を排除しようとして益々それにとらわれていく。森田療法の要諦は、患者がとらわれから脱して「あるがまま」の自分を受け入れ、自分らしく生きるように援助することである。

近年、森田療法は神経症だけでなくうつ病や種々の心身症に適応が広がり、がんの患者のメンタルヘルスにも応用されている。当日は森田療法の概要を解説すると共に、がん患者の心理的支援についても紹介することにした。

「慈恵医大附属病院におけるスピリチュアルケアの歴史と現状 ～症例報告を交えながら～」

東京慈恵会医科大学附属病院 SCW 同大学非常勤講師 神 仁先生

東京慈恵会医科大学附属病院 SCW 同大学訪問研究員 内山 美由紀先生

東京慈恵会医科大学附属病院においては、その創立当初から、イギリスにおいて全人的医療を学んだ高木兼寛の思いにより、宗教者による「日本的なスピリチュアルケア」が実践されていた。その歴史は国体思想の台頭とともに昭和初期には一旦姿を消すことになるが、平成の時代になり再び導入が試みられてきた。

本報告においては、その創設期の有り様を紐解きつつ、今日における病院内での「スピリチュアルケア＝いのちのケア」の実践について紹介したい。また、幾つかの症例をあげながら、患者が抱えるスピリチュアル・ペインの多様性とスピリチュアリティの確認・確立へのプロセスを振り返りたいと思う。